

優秀賞

厳しさのむこう側

山形県 第十中学校 二年
高橋 抱

中学一年生の6月。コロナ禍の休校が明けてから、やっと念願の部活動が始まった。剣道部に入部したのは、僕を含めてたったの五人。そのうち男子は二人だけ。しかも、二人とも初心者だった。

防具をつけるのにも毎日ひと苦勞。先輩はそんな僕に、毎日根気強く防具のひもの結び方を教えてくれた。それでも結べない僕の胴に、手を伸ばしてひもを結んでくれた。そんな僕に、ある日、先輩が言った。

「お前が自分で防具をつけられるようにならないと、チームにも迷惑がかかる。それに後々、自分も困ることになる。だから、早めに自分でできるように練習して。」

その厳しい口調に僕は落ち込み、一人でしっかり結べるよう練習しなければ……と思った。先輩の言葉に動かされて、ぼくは必死に練習し、なんとか結べるようになった。

やがて、防具をつけて練習できるようになった。先輩たちの打ち込みは強く、技を受けると、僕はいつもよろけていた。すると、

「後ろに下がるな。下がると、爪がぶつかってけがをするから、ちゃんと足を踏ん張って受け止めるようにして。」

またもや、先輩から鋭いアドバイス。初心者の僕は、いつも先輩から厳しく言われることだらけだった。そして、コロナ禍で大会が軒並み中止になり、思うように公式戦に出場できないまま、とうとう先輩たちの最後の中体連を迎えた。

先輩たちは順調に勝ち進んだ。県大会に行けるだろうと、僕たちはみんな信じていた。先輩たちと練習できる日も続くと思っていた。ところが、先輩たちは惜しくも県大会出場を逃してしまった。僕は、先輩の顔を見るのがつらかった。あんなにひたむきに頑張ってきた先輩方の姿をもう見るできないことがつらかった。声をかけることもできなかった。

閉会式が終わり、玄関から出ると、外は夕闇に包まれていた。先輩がずっと僕に近づいてきて、まっすぐに僕を見た。

「お前はまじめに頑張ってきた。お前なら、これからみんなを引っ張れると思う。だから、自信をもって、仲間にきちんと声をかけられるようにしろよ。」

暗くても、先輩の強い目の光を感じた。その目を見た瞬間、

「あっ、これまでの先輩たちの厳しさは、僕たちのためだったんだ。先輩たちだって、コロナ禍で思うように試合や練習ができなくてつらかったのに、僕たちを育てようとしてくれていたんだ」と、はっと気づいた。

思いやりや親切の形は一つではない。相手のことを大切に思えばこそ、生まれてくる言葉や行動がある。厳しい言葉は僕らへの期待であり、成長を願うエールである。そのエールを僕たちは下級生につないでいきたい。